

歴史散歩

中面の番号と合わせてご覧下さい

① なるかわ 鳴川の石畳



鳴川を渡り玖波に入り、西に進むと山の麓に「鳴川の石畳」があります。寛永9年(1632)陸奥磐城平藩主内藤政長が、幕府上使として、広島藩を通過することになり、急遽、鳴川に石畳が整備されました。

② 馬ためし



唐船浜から玖波の宿場に抜ける山道に、馬も登ることをためらうほどの急な坂があり、「馬ためし」と呼ばれていました。明治の初め、広島・大竹間新道の建設が進み、隧道(トンネル)が開通すると、便利の悪い山道の街道はすたれていきました。

③ くぼ 玖波の延命地蔵



玖波隧道の右手を登る傍に、延命地蔵が祀られ、古くから参詣者が訪れています。保育地蔵とも呼ばれていますが、特に耳の病を癒すと伝えられています。

④ 玖波の町並み



玖波宿は、安芸の国の最終宿場町として、参勤交代や交易などで賑わっていました。慶応2年(1866)の長州の役「芸州口の戦い」で玖波村は焼失。宿場町としての役割は終わり、その後明治から大正に建てられた町並みで、「起(むく)り屋根」「卯建(うだ)つ」「釣井(つるい)」「鍵道(かぎみち)」「つし(中二階)」などの建物が残されています。



楽しく歴史学習しながら歩こう

西国街道は、江戸時代になって広島藩で呼ばれた街道名で、古代から中世までは都と九州大宰府を結ぶ日本唯一の大陸であった山陽道の名称が使われていました。江戸開府後は、政治の中心が江戸に移り、山陽道は東海道など五街道に次ぐ脇街道となりましたが、西国へ向かう重要な街道として整備が行われました。また、参勤交代や多くの交易で街道筋の宿駅が利用され賑わうようになりました。大竹路は、東は鳴川の石畳から始まり、広島城下元安橋東詰から数えて七里目にあたる「一里塚」があったと言われる峠の峠の山道を通り「玖波宿」に入ります。さらに西に向うと、江戸時代の初期つかの間の城下町でその後漁業の町として栄えた小方に入ります。ここから再び山道に入り、幕末の長州の役で激戦地となった「苦の坂」を越えると、芸防の国境を流れる小瀬川に出でます。川沿いの道を下っていくと、終点の「木野川の渡し場跡」にたどり着きます。この間の道のりは七十四町三間(約8.1km)ありました。多くの歴史を刻みながら、語り継がれた史跡を訪ねてみましょう。

発行 大竹市教育委員会 編集/構成 大竹市歴史研究会

お問合せ 大竹市教育委員会生涯学習課 電話 0827-53-5800

発行年月 令和3年(2021)3月

⑤ 玖波宿本陣跡



大名行列も多くなり、玖波宿は活況を呈しました。この頃、本陣(茶屋)が設けられ、18畳の大広間と15の部屋からなる大規模なもので、風光明媚な瀬戸内海の景色が眺望できました。慶応2年の長州の役で焼失し、「本陣」は建て替えられることはありませんでした。絵:長門彰男氏作

⑥ かどやつるい 角屋釣井と高札場跡



「角屋釣井」は、宿駅の馬の繋留所や、情報の交換の場として賑わっていました。隣接の高札場は、藩の告知(法度・禁令・掟)など、様々な知らせの札が立てられました。明治に入り制度が廃止され、恵比須神社が移築されました。

⑦ しょうみょうじ 称名寺の喚鐘



喚鐘は、時を告げる梵鐘よりも小型で、法会などの開始を知らせる時に使われ、寺院の廊下などに吊るされています。この鐘は市域では最も古く、生前に戒名を受け来世の安寧を願う女性によって、天和元年(1681)に寄進されました。同年代の廿日市の鋳物師山田治右衛門藤原貞栄の鐘と同じ文様が認められます。

⑧ りきりょうせき 大歳神社「力量石」



「力量石」は台風で倒壊した鳥居の再建工事中に発見されました。力比(りきりょう)や身体(からだ)の鍛錬(だんれん)のための「力石」で、西日本では2番目に重いとされています。石碑の表面に「角ヶ崎直松」という地方相撲の力士が明治23年に、24歳で78貫目(292.5kg)を抱え上げたことと記されています。